**総門（正面の門）**

総門は、建長寺の正面の入り口にあたります。禅宗の寺の典型的な構図に倣って、建長寺にはほぼ北から南に5つの主な建造物が一列に配置されており、総門はその1つ目です。14世紀と15世紀に寺は何度も火事に見舞われましたが、再建時にも寺の当初の配置は変更されませんでした。

現存している総門は、1783年に京都の般舟三昧院に建てられたもので、1940年に建長寺に移築されました。総門は巨福門とも呼ばれています。門の最上部の木の標識には、建長寺の山号である「巨福山」と書かれています。この書は、寺の第10代住職一山一寧（1247–1317）の作品を元にしたものです。

総門から山門まで、両側に桜が並ぶ舗装された参道が続いています。春になると、アーチ状に伸びた枝はピンクに咲き誇るトンネルのようになり、その下には色鮮やかなボタンが咲きます。総門に縁取られたこの光景は、写真家の間で人気のスポットとなっています。